

森林生態

森林生態と種多様性維持

樹木実習（現地）

日時：平成25年8月31日（土） 10:00～15:00

講師：山本 進一（岡山大学 副学長）

概況



第1限 森林生態と種多様性維持(講義)

樹木は針葉樹と広葉樹、常緑樹と落葉樹、軟材と硬材に分けられる。樹木の外部形態は高木・低木・つるに分けられ、それぞれ樹冠・葉群と枝・幹・根から成り、樹冠は円形・長楕円形・傘状・円錐形・断続形・しだれ型に分けられる。葉は複葉と単葉に分けられ、複葉はさらに羽状複葉・二回羽状複葉・三出複葉・二回三出複葉・掌状複葉・鳥足状複葉に分けられる。枝は大枝・枝・一年生枝・当年枝に分けられ、芽は花芽と葉芽・混芽に分けられる。幹は単一幹・複数幹・萌芽幹に分けられる。

樹木は維管束形成層による二次肥大成長が起こり、リグニンで細胞を固めることにより、セメントの役割を果たしている。

「森」と「林」の違いについて、森は大集団、複層型で自然にできたもの、林は小集団、単層型で人工的なものを指し、学術用語や合成語にはほとんど「林」が使われる。

日本の森林植生は、暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)、冷温帯落葉広葉樹林(夏緑樹林)、亜寒帯(亜高山)針葉樹林、中間温帯林、針広混交林に分けられる。

暖温帯常緑広葉樹林は、シイやカシなど常緑性の樹木が主となる森で、沖縄「やんばる」の森、長崎県対馬竜良山、奈良県春日山、東京都三宅島・御蔵島、宮崎県綾町などが代表的である。

冷温帯落葉広葉樹林は、ブナ林・ナラ林などであり、ブナは樹齢40年以上で開花・結実を開始し、5～6年に1度豊作年が来る。これは捕食者を減らすことにつながっている。

亜寒帯常緑針葉樹林はトドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、ダケカンバなど、亜高山帯針葉樹林はシラビソ、オオシラビソ、コメツガ、トウヒ、カラマツ、ダケカンバなどが主要構成樹種である。

また、人工林と雑木林の比較や樹種の特徴、カシノナガキクイムシによるナラ枯れ、クロツマキシャチホコによるアベマキの葉の食害の事例なども紹介された

第2限 樹木実習(現地)

遊歩施設において、樹木実習がなされた。

ホオノキ、ムラサキシキブ、アオハダ、エゴノキ、ヒサカキ、ヒイラギ、ヤブツバキ、サカキ、タカノツメ、リョウブ、ヌルデ、アカマツ、クロモジ、アラカシ、アベマキ、コナラ、クサギ、カキ、ヤマボウシ、アセビ、シャリンバイ、ネジキ、イヌザンショウ、ミヤマホトトギス、ガマズミ、エゴノキの26種類についてそれぞれの特徴や用途などの解説がなされた。

その後センターに戻り、総括がなされた。